

別冊 3

生駒南小学校・生駒南中学校整備事業基本構想（案）

～これからの学びを実現する学校づくり～

令和6年 月

生駒市教育委員会

目次

1	はじめに	1
2	生駒南小学校・生駒南中学校の歴史	2
	(1) 生駒南小学校の歴史	
	(2) 生駒南中学校の歴史	
3	生駒南小学校・生駒南中学校の現状と整備の目的	3
	(1) 各校の児童生徒数・学級数の現状	
	(2) 各校の施設の現状	
	(3) 学校規模の適正化について	
4	学校づくりの方向性について	7
	(1) 教育の方向性	
	(2) 施設の方向性	
	(3) 校区の方向性	
5	生駒南小学校・生駒南中学校整備事業の具体的内容	9
	(1) 設置方針	
	(2) 学校の設置場所	
	(3) 通学区域	
	(4) 整備スケジュール	
6	地域と考えるこれからの学校	12
	(1) 第1回会議	
	(2) 第2回会議	
	(3) 第3回会議	
	(4) 新しい学校づくりの視点	

1 はじめに

全国的な少子化の傾向と同様に、生駒市でも少子化が進行しています。今後20年間で児童生徒数は約25%超の減少が見込まれており、既に小規模校として運営を行っている学校もある中、ますます小規模化が進行することが懸念されています。

今後は、このような児童生徒数の減少に対応しつつ、第2次生駒市教育大綱の基本方針のひとつである「21世紀を生き抜くしなやかでたくましい人づくり」を進めていくには、変化が激しく多様化が進む社会の中でも、様々な情報や出来事を受け止めながら課題を見つけ、自ら率先して主体的に判断・行動し、他者と協働しながら課題を解決していくための力の育成を図る必要があります。児童生徒数の減少が見込まれる中、子どもたちが「学び合い、高まり合える」環境を保障するためにも、国が推進している小中一貫教育や教育環境の維持・充実を図っていくことが重要になります。

生駒市では、これらの状況を鑑みて平成30年4月に生駒市学校教育のあり方検討委員会を設置し、令和2年2月に答申を受けました。

当該答申では、生駒南中学校区の学校規模適正化の方向性として、通学区域の見直しや小中一貫教育の推進も視野に入れた学校規模適正化の検討について言及されました。また、「学校再編（統合）」が学校規模適正化の有効な手法の一つとして示されたことから、生駒南小学校及び生駒南第二小学校においては、保護者・地域住民・学校・行政から構成される地域協議会が設置され、それぞれからの意見書が生駒市教育委員会に提出されました。

提出された意見書をもとに、生駒市教育委員会及び生駒市総合教育会議で審議・協議を重ねた上で「生駒市立小・中学校の再編等に係る方向性（令和3年11月）」を決定し、生駒南小学校、生駒南中学校の改修のあり方と、生駒南中学校の規模の適正化及び校区の見直しを速やかに検討していくこととなり

ました。

その後、令和4年度に関係者で構成される新たな協議体として「生駒南小・中学校の今後を考える会議」が開催され、当該会議や保護者向け説明会、住民向け説明会での意見を踏まえた上で、令和5年1月23日に市長が招集する総合教育会議を経て、令和5年生駒市教育委員会第1回定例会において「生駒市立生駒南小・中学校の今後の方向性について」が議決されました。

これらの議論の経緯を踏まえ、生駒南小学校及び生駒南中学校の教育環境を維持・充実し、未来に向けた新しい学校を整備するための方向性を示すものとしてこの基本構想を策定しました。

2 生駒南小学校・生駒南中学校の歴史

(1) 生駒南小学校の歴史

明治 7 年	5 月	有里竹林寺に開明舎として創立
明治 22 年	4 月	南生駒村立南生駒村尋常小学校に改称
大正 10 年	2 月	現在地に移転改築
昭和 22 年	3 月	南生駒村立南生駒小学校に改称
昭和 30 年	3 月	生駒町立生駒南小学校に改称
昭和 46 年	1 1 月	生駒市立生駒南小学校に改称
昭和 49 年	1 1 月	創立 100 周年記念式典挙行
昭和 62 年	4 月	体育館落成、運動場拡張工事
昭和 62 年	6 月	プール完成
平成 26 年	1 1 月	創立 140 周年記念式典

(2) 生駒南中学校の歴史

昭和 22 年	4 月	南生駒村立南生駒中学校として開校（南生駒小学校に併設）
---------	-----	-----------------------------

昭和28年	4月	萩原350番地に校舎竣工
昭和30年	3月	生駒町立生駒南中学校に改称
昭和46年	11月	生駒市立生駒南中学校に改称
昭和48年	1月	新体育館竣工
昭和55年	3月	東館竣工
昭和60年	8月	プール竣工
平成20年	9月	耐震補強工事
平成28年	11月	創立70周年記念式典

3 生駒南小学校・生駒南中学校の現状と整備の目的

(1) 各校の児童生徒数・学級数の現状

令和5年5月1日現在で生駒南小学校の児童数は375人、学級数は18学級（うち特別支援学級は6学級）です。生駒南中学校の生徒数は143人、学級数は8学級（うち特別支援学級は2学級）です。

今後の児童生徒数は、生駒南小学校は減少傾向ですが、生駒南中学校は増加傾向を見込んでいます。令和9年度の児童生徒数は生駒南小学校で326人、学級数は18学級（うち特別特別支援学級は6学級）で、生駒南中学校は178人、学級数は8学級（うち特別特別支援学級は2学級）を見込んでいます。

▶現状の児童生徒数と学級数（令和5年5月1日現在）

小学校	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特支	合計
生駒南小学校	2	2	2	2	2	2	6	18
	(3)	(4)	(4)	(7)	(4)	(4)		
	56	53	49	57	68	66	26	375

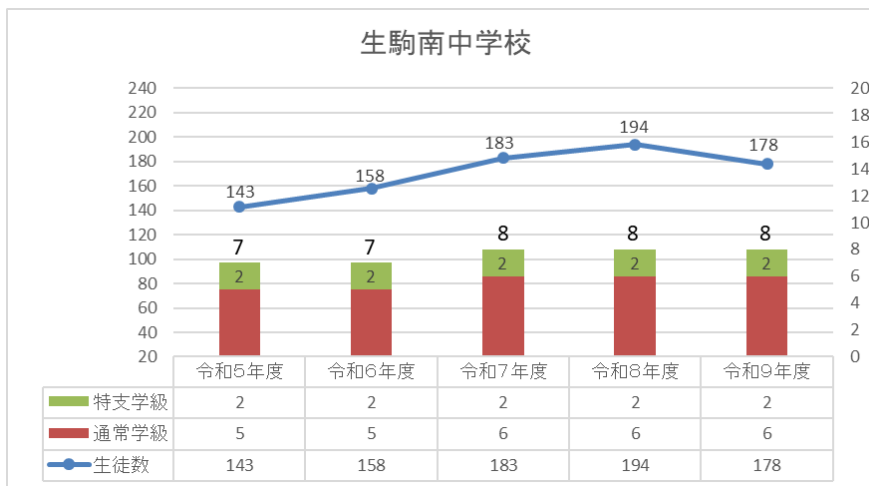
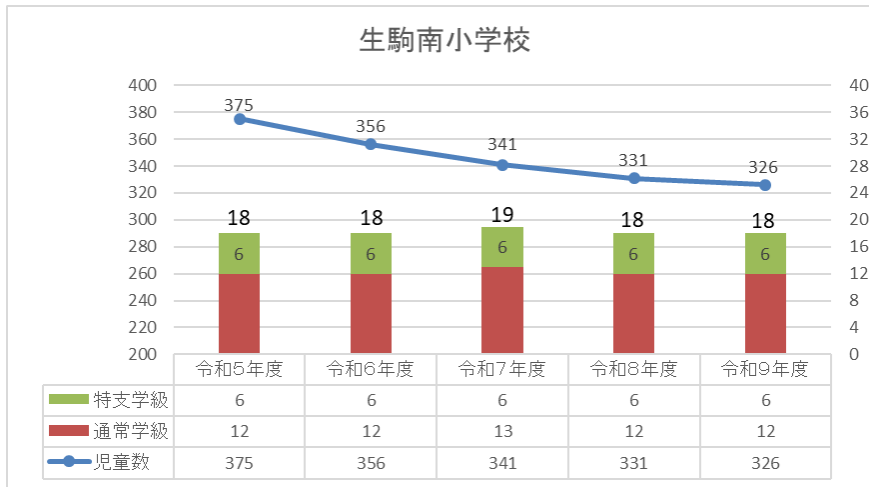
中学校	1年	2年	3年	特支	合計
生駒南中学校	2	2	2	2	8
	(3)	(3)	(5)		
	44	40	48	11	143

上段：クラス数(実学級数)

中段()数：特別支援学級在籍児童・生徒数(外数)

下段：児童・生徒数

▶今後の児童生徒数と学級数の見込み（令和5年5月1日現在）



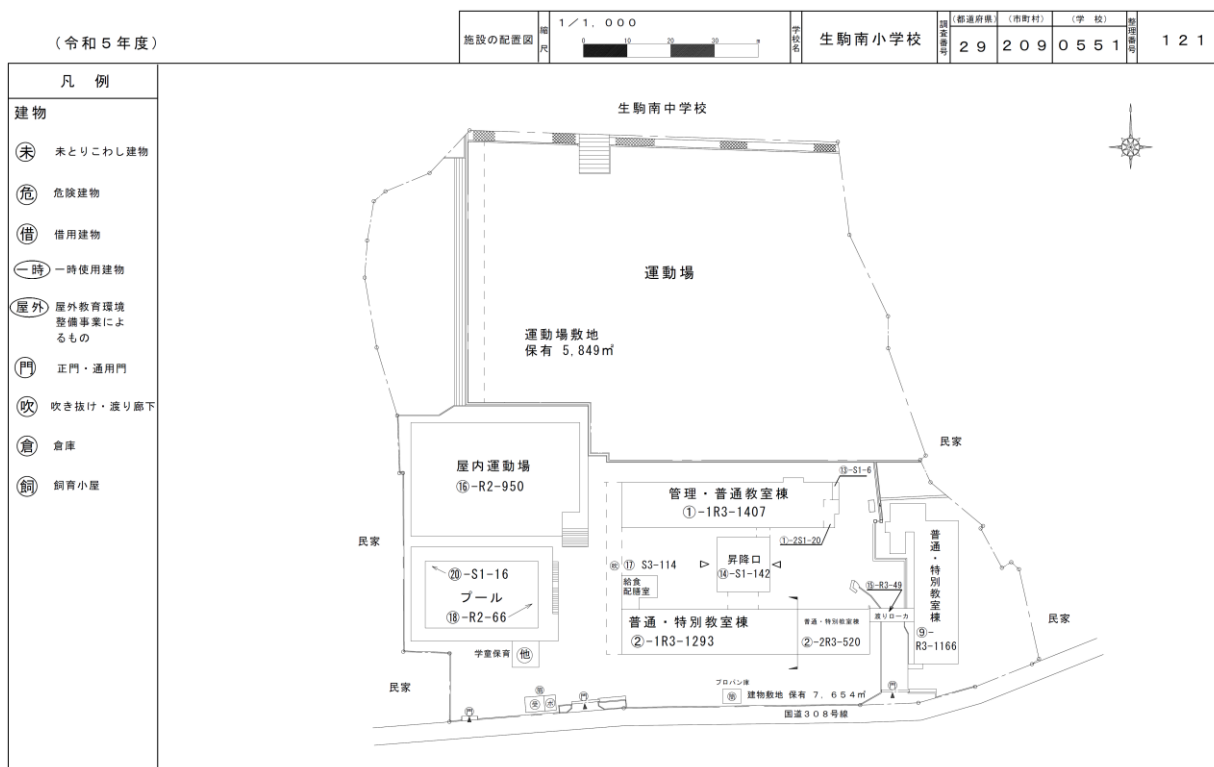
(2) 各校の施設の現状

生駒南小学校は、最も古い校舎で築50年を超え、最も新しい校舎でも35年を超えています。また、生駒南中学校は、最も古い校舎で築50年を超え、部室やプール管理棟を除き、主に生徒が日常生活を送る校舎では、最も新しいものでも40年を超えています。各校とも老朽化が進行しており、校舎等の更新が必要な時期を迎えています。

▶現状の施設の建築年及び配置図

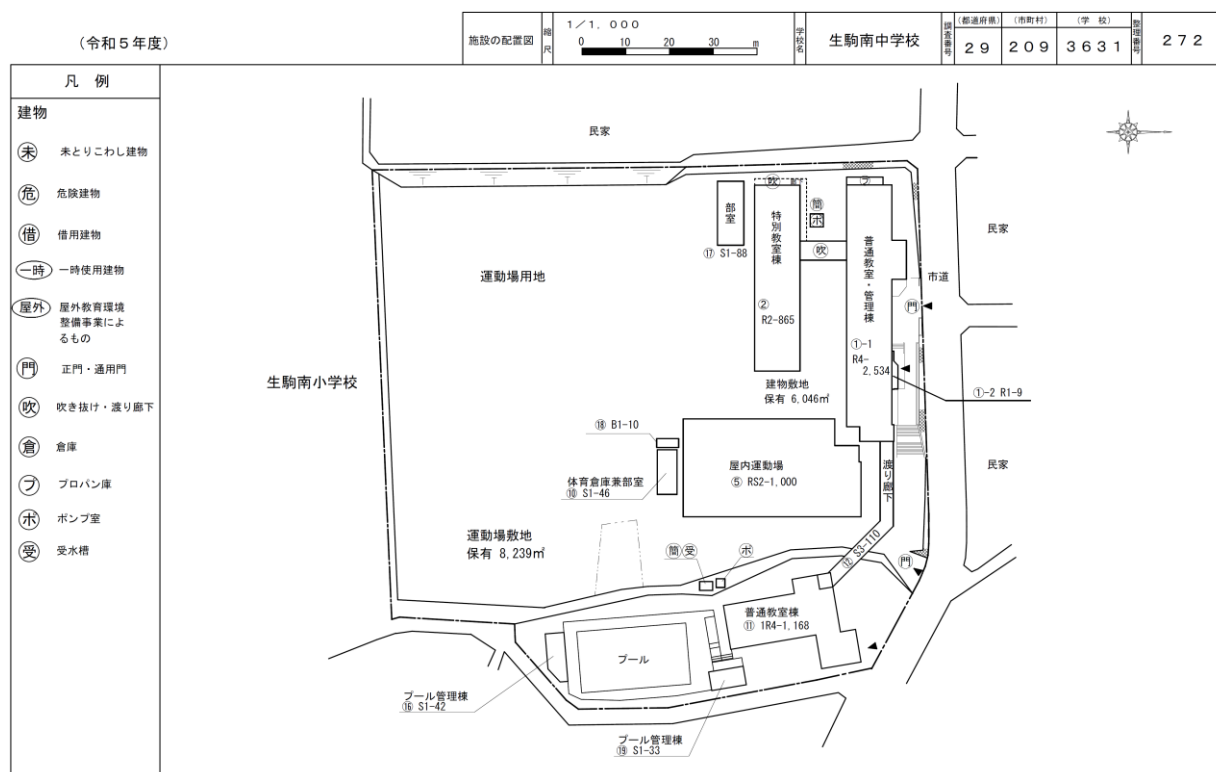
ア 生駒南小学校

棟番号	枝番	階数	建築年月
①	1	3	昭和42年12月
①	2	2	昭和62年6月
②	1	3	昭和42年3月
②	2	3	昭和50年2月
⑨		3	昭和53年11月
⑬		1	昭和57年8月
⑭		1	昭和60年9月
⑮		3	昭和53年11月
⑯		2	昭和62年3月
⑰		3	昭和62年3月
⑱		2	昭和62年6月
⑳		1	昭和62年6月



イ 生駒南中学校

棟番号	枝番	階数	建築年月
①	1	4	昭和46年3月
①	2	1	昭和63年9月
②		2	昭和46年3月
⑤		2	昭和47年12月
⑩		1	昭和54年8月
⑪		4	昭和55年3月
⑫		3	昭和55年3月
⑯		1	昭和60年7月
⑰		1	平成3年5月
⑱		1	平成13年3月
⑲		1	昭和60年7月



(3) 学校規模の適正化について

本市の望ましい学校規模（学級数）は、「生駒市立小・中学校のあり方に関する基本的な考え方（令和2年10月）」に次のように示されています。

	小規模	望ましい規模	大規模
小学校	11 学級以下	12 学級～24 学級（各学年 2～4 学級）	25 学級以上
中学校	8 学級以下	9 学級～18 学級（各学年 3～6 学級） （19～21 学級も許容範囲とする）	22 学級以上

この基準を生駒南小学校及び生駒南中学校に当てはめると、生駒南小学校は通常学級が今後も全学年で 2 学級以上と見込まれるため、望ましい規模になります。一方、生駒南中学校は通常学級が最も多い年度でも 6 学級と見込まれることから、小規模の学校に当てはまります。

小規模校では、一人ひとりの状況に合わせたきめ細かな指導を行いやすいことや一人ひとり活躍する機会を創出しやすいこと、施設や備品を余裕を持って使用できることといったメリットがある一方、クラス替えが行いにくく新たな人間関係を構築する力の育成がしづらいこと、合唱・合奏などの集団学習に制約がでること、部活動の種類が限られてしまうことや教職員一人ひとりの校務や行事の負担が重くなることといったデメリットも生じます。

このことから、通学区域を柔軟にできるよう調整区域を設定するとともに、より魅力的な施設一体型の小中一貫教育を進めることによって、望ましい規模を確保し、子どもたちにとってより良い教育環境を整備していきます。

4 学校づくりの方向性について

生駒南小学校及び生駒南中学校の整備に当たっては、令和 5 年生駒市教育委員会第 1 回定例会において議決された「生駒市立生駒南小・中学校の今後の方向性について」で定められた教育・施設・校区の次の 3 点に沿って整備を行っていきます。

(1) 教育の方向性

- ① 第 2 次生駒市教育大綱に掲げる基本方針 2 「21 世紀を生き抜くしな

やかでたくましい人づくり」を基に、子どもにとって将来必要とされる資質・能力とは何か、学校と地域がどのような連携を進めていくのかなど、第3次生駒市教育大綱の策定も見据えて、目指す教育・未来の学校づくりについて学校、保護者、地域がビジョンを共有しながら進めていく。

- ② 生駒市が推進する小中一貫教育のメリットを最大限に生かし、子どもたちにとって最適な教育機会を提供できるよう生駒南小学校、生駒南中学校の教育の方向性に関する検討委員会を設置し、広く様々な意見を取り入れながら検討していく。
- ③ 小学校から中学校への9年間を見通した6-3制をベースとする小中一貫教育を進める。

(2) 施設の方向性

- ① 現在の生駒南小学校、生駒南中学校の敷地内において、子どもの主体的な学びの実現をはじめ、子どもの成長・発達にとって最適な教育環境を提供し、生駒市教育大綱の理念を具現化するために、本市が進めている小中一貫教育を一層推進できる施設一体型※の学校施設を検討する。
- ② 施設の建替に当たっては、学校教育と社会教育が融合した、多様性のある学びが実現できる環境を確保できる施設となるよう検討する。
- ③ 地域の方々や市民が学校施設を有効に活用し、活気のあるまちづくりに寄与する施設を整備していく。

(3) 校区の方向性

小瀬町、壱分西等隣接する地域の子どもたちが、生駒南中学校に通学することができるよう早期に調整区域を設定する。

※施設一体型とは…

小・中学校が同一校舎又は同一敷地内に設置されている形態のこと

5 生駒南小学校・生駒南中学校整備事業の具体的内容

(1) 設置方針

「生駒市立生駒南小・中学校の今後の方向性について」の施設の方向性で示されたところにより、生駒南小学校及び生駒南中学校の小中一貫教育を一層推進するために施設一体型の学校施設の整備を進めていきます。

これからの学びを実現する生駒南小・中学校の施設整備を考える会議のワークショップから出された視点を踏まえた上で、建て替えに当たっては、学校教育と社会教育が融合した多様性のある学びが実現できる環境を確保できる施設となるようにするほか、地域住民や市民が学校施設を有効活用することで、南生駒地区一帯の活気あるまちづくりに寄与できる施設を整備していくこととします。

▶小中一貫校の特徴

多様性：ヒト（児童・生徒・教職員・地域・集団・学校社会）、モノ（空間・物的環境）、コト（学習・生活・特別活動）が混ざり合う。

関係性：多様なヒト・モノ・コトが混ざり合うことで、相互理解による新たな意識や取り組みが生まれる。

時間性：子どもの発達段階が意識化されることで、学齢に応じた適切な環境や学びを連続的に徐々に移行し、発展する取組ができる。

体系性：義務教育9年間を通した長期的な学びを体系化できる。

校舎に関しては、施設一体型として新たに建設を行い、現校舎は解体します。屋内運動場も新たに建築することとし、現屋内運動場は解体します。なお、屋内運動場は校舎内に設置する可能性も排除しません。プールに関しては、近年の全国的な情勢を見極めつつ、設置を行う場合は新築することとし、

現プールは解体する方向で検討を行います。

(2) 学校の設置場所

学校の設置場所については、現在の生駒南小学校及び生駒南中学校の敷地を利用することとします。

生駒南小学校及び生駒南中学校はグラウンドを挟んで隣接しており、現在の立地場所に新たな学校を建設することにより通学距離の変更が伴わないことから、児童生徒にとっても好ましい立地となっています。

▶学校敷地の概要

	建物敷地	運動場	借地
生駒南小学校	7,654 m ²	5,849 m ²	1,102 m ²
生駒南中学校	6,046 m ²	8,239 m ²	—

(3) 通学区域

通学区域は、現在は次の表のとおりとなっています。小中一貫校の整備に向けては、小瀬町や壱分西等の隣接する地域の子どもたちが通学することができるように、早期に調整区域を設定することとします。

▶現在の通学区域

学校名	通学区域
生駒南小学校	萩原町、藤尾町、西畑町、鬼取町、小倉寺町、大門町、有里町、小瀬町、青山台
生駒南中学校	萩原町、藤尾町、西畑町、鬼取町、小倉寺町、大門町、有里町、小平尾町、青山台

▶現在の調整区域

学校名	調整区域	調整区域の本来の通学校
生駒南小学校	小平尾町の一部	生駒南第二小学校
生駒南中学校	小瀬町の一部	大瀬中学校

6 地域と考えるこれからの学校

令和4年度に「生駒市立生駒南小・中学校の今後の方向性について」が決定されたことを受けて、令和5年度は「これからの学びを実現する生駒南小・中学校の施設整備を考える会議」を開催しました。

(1) 第1回会議

会議の座長を務める横山俊祐大阪市立大学名誉教授から、建築の側面から見た小中一貫校の特徴について説明があり、小中一貫校が始まったきっかけやそれによる効果の解説がありました。その後に参加者が小中一貫校についてそれぞれ感じていることをディスカッションしました。

ディスカッションでは、参加者から次のような意見がありました。

- ・小中一貫校では、小学1年生から中学3年生まで異年齢の子どもたちが上手に繋がり、従来のクラスや学年といった単位に加えて幅広い年齢の子どもたちが一緒にいることによる「出会い」に期待している。
- ・小学校と中学校の違いによるギャップも解消されるのではないか。
- ・小学校と中学校の教職員が同じ職員室にすることで、多くのメリットが生まれると感じる。
- ・地域と学校がつながることで、より楽しい活動が展開できる。
- ・地域の力をより学校に提供できるような環境づくりも大切になる。
- ・学校を地域コミュニティの拠点と位置付ける取り組みが広がれば良い。
- ・課題はあると思うが、学校現場は基本的に大丈夫という実感がある。
- ・学び方が大きく変わりつつある中で、従来型の施設では対応が難しくなっている。従来の一斉授業スタイルの教室環境が変わることで子どもたちの学びも大きく変わることを期待している。
- ・学校には避難所としての役割もあるため、その観点からの議論も必要。
- ・新しい環境に変わることで教職員にとっても働きやすい環境になり、教

育効果も上がると思う。負担が増えるという意見もあるが、みんなで一緒に取り組めばそこまで負担増にはならないと感じるとともに、楽になる部分も出てくると思う。地域の方の参画も同時に考えられれば、さらに教職員の負担も減るのではないだろうか。

- ・地域も、保護者も、教職員も変わる必要がある。その結果、子どもたちも変わる。みんなで変わることで、より良い方向に変化していく契機になるように捉えたい。
- ・今までと違う新しい学校を作っていくには、これまでの経験や固定観念にとらわれずに、それを乗り越えていける取り組みも必要だと思う。



▶まとめ

小学校と中学校が一貫校になることで、単独ではできないことができるようになることはたくさんある。一方で、一貫校を作ったことで全ての課題が解決するわけではなく、一貫校はあくまでも手段であることを念頭に置き、どう活かすかを考えていくことが重要になる。

(2) 第2回会議

「学びや施設に関する学校の未来について」ワークショップを実施しました。参加者は「思い出を共有編」と「未来の学びを共有編」の2つのテーマのディスカッションを進める中で、これからの未来を担う子どもたちが多感な時期を過ごす学校施設のあり方を考える機会となりました。



①「思い出を共有編」での気づき

思い出を共有編では、「学校での友達との思い出」「学校での校舎や建物の思い出」「学校での行事に関する思い出」の3つのテーマで、参加者の心に残っている学校での思い出を出し合いました。

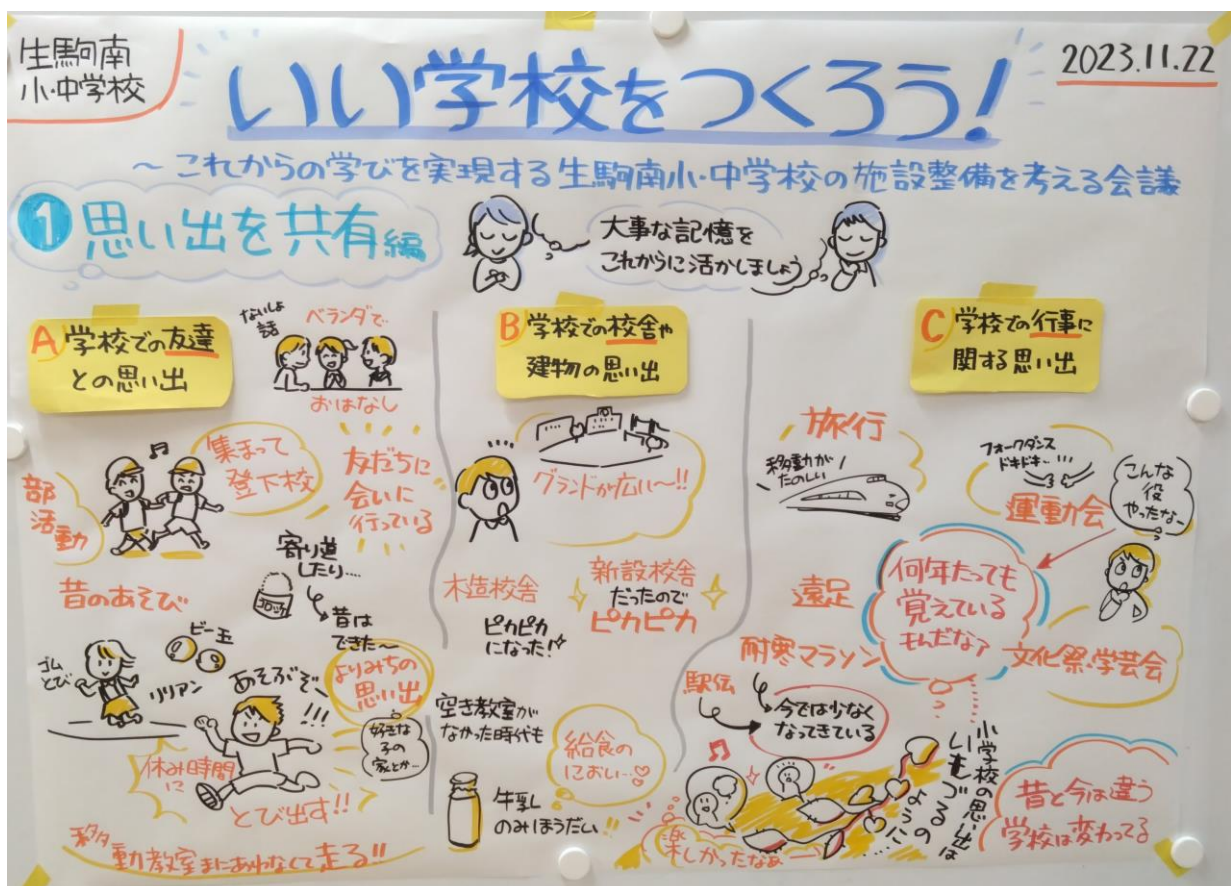
様々な思い出話が出てきましたが、思い出としては最も古い記憶である小学校の話が多く出されており、小学校は特に特別な場所であったことが分かりました。学校の思い出は、芋づる式に思い出すことができるものであり、思い出の宝庫になっていたことに気付かされたディスカッションになりました。

友人と過ごした何気ない日々や、新築当初の新しい校舎やプレハブ校舎で学んだこと、修学旅行や運動会、文化祭や駅伝といった様々な行事。卒業から何年経っていても、学校で過ごした思い出は個々の心の中に残っています。

学校は子どもたちにとってただ勉強をし、生活をする場だけではなく、人生において根となる部分を養うための土台となるものです。新しく学校を作るに当たっては、子どもたちが卒業してからも生駒南小学校・生駒南中学校で過ごした日々を糧として人生を歩むことができるように、記憶に残る経験ができる環境を整備していくことを目指します。

また、今の学校にはない思い出も多く出され、学校は変わらないように見えていても、実は時代によって変化していったことが分かりました。

その時々時代にあった最適な学びが実現できるように、これまでの「学校」という先入観に縛られず、幅広い視野で学校づくりを進めていく必要があります。



② 「未来の学びを共有編」での気づき

未来の学びを共有編では、「昔はなかったけど今はあるもの」「20年後に

必要になると思われるスキル」「今、新入社員に持って置いて欲しいスキル」の3つのテーマでディスカッションを行いました。

ディスカッションでは、それぞれのテーマについて次のような意見がありました。

昔はなかったけど今はあるもの	20年後に必要なと思われるスキル	今、新入社員に持って置いて欲しいスキル
<ul style="list-style-type: none"> ・カラフルなランドセル ・1人1台のパソコン端末 ・インターネット ・エアコン ・洋式トイレ・多目的トイレ ・子どもによる地域奉仕活動 など 	<ul style="list-style-type: none"> ・他者と助け合う力 ・他者を思いやる力 ・国際化に対応できる語学力 ・自分自身で生きる力 ・基礎学力 ・やってみようという気持ち ・変化に対応する力 ・コミュニケーション力 ・豊かな心 など 	<ul style="list-style-type: none"> ・しっかり自己主張すること ・相手を理解する力 ・対面でのコミュニケーション力 ・自分の考えを言語化できる力 ・基礎学力 ・謙虚な心 など

今の学校には、昔にはなかったものがあふれています。子どもたちは1人1台自分のパソコンを持ち、学校に来ることができなくても自宅で授業に参加することができます。トイレも洋式化され、これまではなかった多目的トイレも設置されています。子どもたちは色とりどりのランドセルを背負って学校に通い、これまでのような全員が同じではなく、多様性を認め合うことが当たり前の時代となりました。

目まぐるしく変化する環境の中、学校の在り方も時代とともに変化しますが、建物としての学校は時代が変化してもそこに存在し続けるものです。そのため、時代の変化にも柔軟に対応し、その時々々の教育環境に合わせた使い方が可能な空間を備えた学校施設を整備する必要があります。

また、学校は子どもたちと地域の方々との交流の場としての役割も果たします。子どもたちが幅広い世代の方々と付き合うことでコミュニケーション能力を養うことは、社会に出るための重要なスキルです。さらに、施設一体

(3) 第3回会議

これまでの2回の会議で出された意見を基に事務局が作成した新しい学校を作るための視点（下記①～⑤）の案をブラッシュアップするためのワークショップを実施しました。それぞれの案に対して出た意見の概要は次のとおりです。

①いつまでも心に残り続けるかけがえのない経験ができる学校

- ・この案は結果であるので、②～⑤を充実してすることに尽きる
- ・やさしい先生がたくさんいる
- ・学校らしくない学校
- ・色々な体験ができる
- ・運動場、校外学習など仲間を感じる体験が重要
- ・他学年との交流
- ・学校行事が行いやすく、様々な取組ができる環境
- ・多世代の交流活動

②多様性・個性を尊重し、相手を思いやることができる心を育む学校

- ・オープンスペース
- ・様々な作品にふれられる
- ・ユニバーサルデザインを多く取り入れる
- ・課外授業が多くあること
- ・ボランティア活動
- ・お互いが助け合いのできるような人も思うための強化充実
- ・今でも支援を要するこどもに対して生徒たちは自然に受け入れていると感じている
- ・自分のことを大切に思えるように周囲の大人から言葉かけを繰り返すことで、自然と相手のことを思いやれるような人間関係を構築する

- ・小中学生との交流
 - ・異年齢交流
 - ・動物を育てることにより「生」の大切さを学ぶ
- ③地域や他学年と交流しやすく、子どもたちが多様な人たちと交わり、豊かな人間関係を築くことができる学校
- ・物理的な動線
 - ・学校施設の中に地域スポーツクラブの事務局を作る
 - ・地域のホールや公民館などがある学校
 - ・地域の人が自由に集まれる教室やスペースが身近にある
 - ・地域との交流施設。ゾーニングが重要（文化・スポーツ）
 - ・地域行事にも活用できる施設
 - ・高齢者も行き来しやすい校舎
 - ・学校ボランティアの充実、拡大
 - ・学校と地元との交流を盛んに
 - ・地域の人たちの知識や経験を活かす放課後学習
 - ・多様な体験活動
 - ・国内外の学校との交流
 - ・小学生、中学生が交流できる場所がある
- ④子どもたちが自ら学びたいと感じ、主体的に物事に取り組むことができる学校
- ・自分が興味のあることを子どもたちが先生となって授業をする
 - ・学校の行事に子どもたちが作り上げるものを取り入れると、より自信がつき思い出になる
 - ・パソコンの利用を前提とした机や椅子を用意する
 - ・広くて資料がたっぷりの図書館にする

- ・図書室を自由に使えるようにし、授業関連の教材を充実させる
- ・部活を活発にできる人数を確保したい
- ・タブレットを片手に子どもたちが資料コーナーへ行き、自分が設定したテーマを探求する時間がある
- ・理科の実験などを通じて興味を深めるきっかけとする
- ・自分の考え（意見）を自ら解いていく環境づくり
- ・わかった！できた！と実感できる学習
- ・教室のスペースを広く取り、様々な授業形態で授業ができる
- ・学校と地域との関わりを経験することで、生徒が自ら主体的に考える気持ちが芽生える

⑤時代の変化にも柔軟に対応できる、これまでの学校にはない新しい視点を取り入れた学校

- ・音楽や映像を見るホールがある
- ・温水プール（地域・学校）の設置
- ・個性を尊重する授業をする
- ・新しいことにチャレンジできる環境
- ・ケーススタディを取り入れた教育を行う
- ・教科や人材にとらわれない仮称「南を学ぶ時間」の創設
- ・今までの形にとらわれないぬくもりのある教室にする
- ・時代の変化に対応できる自由度の高い教室を複数設ける
- ・国際化学習の強化
- ・先進学校の考えを取り入れながらヒントを得て、地球規模の情報収集をする
- ・ICTを多く取り入れる。様々なものの自動化。電子案内板などの設置
- ・教師も学び続けることが大切

また、その他の意見として次のような意見が挙げられた。

- ・ 学校周りの道路や国道308号線の通学路の歩道を広くして欲しい
- ・ 南生駒駅は生駒南地区の重要な拠点に指定されているため、南生駒地区の総合的な整備を考える
- ・ 9歳差を活かした生活
- ・ 中学校では広々としたスポーツ施設を、小学校では芝生の緑の校庭。地域の人の交流の場にもなる
- ・ 身体的な健康を向上させる学校
- ・ 居心地がよい空間。楽しくてしょうがない空間に

今回の会議では、それぞれの案から考えられる具体的な教育内容や設備についての意見が多く出されました。

「これからの学びを実現する生駒南小・中学校の施設整備を考える会議」では、新しい学校を作っていくためにどのような教育環境にしていきたいかを主に議論してきました。どのような教育環境を作りたいかを定めることは、建物や設備を整備するために必要不可欠です。建物や設備は、目指すべき教育環境を達成するためのツールであり、それ自体が教育環境を決定するものではないことに留意しなければなりません。

新しい学校では、この会議で出された視点を土台にして考えられた施設を活用して、その視点を目指して教育活動を進めていくことが必要になります。



▶まとめ

新しい学校づくりを考えるには、カタチの問題（ハード）と、子どもたちがどのように学び、育つのか、また、地域と学校がどのように繋がるのかなどの中身（ソフト）が両輪となります。

今回の会議で出された意見では、学習指導要領の改訂やGIGAスクール構想などが目指す「主体的」「協働的」「個別最適な学び」やコミュニティスクールにおける学校・地域連携の強化といった国が進めるこれからの学校のあり方と同じ方向性を向きつつも、一貫校らしい多様な交流や人間関係、郷土学習、地域の願いとして「心」を育てる教育など、地域全体で地域独自の学校づくりに向かう意識が示されました。

これらの意見を学校づくりに反映させ、子どもたちが生き生きと豊かに、楽しく学べる学校を作っていくことが肝要です。

(4) 新しい学校づくりの視点

会議での議論やワークショップの意見を踏まえ、地域で考えた新しい学校を作るための視点を次のとおり定め、新しい学校施設の整備や教育活動を行っていきます。

1 多様性・個性を尊重し、相手を思いやることができる心を育む学校

～ユニバーサルデザインを取り入れ、誰もが心地よく過ごせる施設の中で、自然と思いやりの心が育つ学校に～

2 地域や他学年と交流しやすく、子どもたちが多様な人たちと交わり、豊かな人間関係を築くことができる学校

～幅広い年齢層の子どもたちが成長できるとともに、地域の人が気軽に利用できる空間がある学校に～

3 子どもたちが自ら学びたいと感じ、主体的に物事に取り組むことができる学校

～子どもたちの主体的な学びを促す学習環境や教育活動が充実した学校に～

4 時代の変化にも柔軟に対応できる、これまでの学校にはない新しい視点を取り入れた学校

～どのような時代にも対応できる自由度の高い空間を有する学校に～

5 いつまでも心に残り続けるかけがえのない経験ができる学校

～仲間と共に多様な体験を重ねることができる学校に～